

2016 / 春 / No.100

来ぶらり

祝! 100号
記念特別号

🍰 ピックアップ“来ぶらり1号”

🍏 33年分のバックナンバーを振り返ってみました

👤 初代編集委員へのインタビュー

👉 来ぶらり200号の未来予想

🍷 館長からのメッセージ

付録付き

ピックアップ“来ぶらり1号”

1983年
生まれ!

来ぶらり創刊の理由は1号の表紙にあり

ドキッとする見出し「いちばん悲しいこと」。当時館長を務められていた波多野里望先生による巻頭メッセージです。

学生を主な対象とする図書館にとって「いちばん悲しい」のは、けっして、本が少ないこと自体ではなく、むしろ、本を借りる学生が少ないことだと、かたく信じているからである。(中略)リッチな情報のつまったこの超ミニコミ誌が、学生諸君の良き友となり、ひいては、諸君の足を文字どおり「ぶらり」と図書館に向けさせるひとつのキッカケとなることを、心から願ってやまない。

学生に本をもっと借りてほしい!という当時の館長の思いから、来ぶらりは誕生したのです。

※別ページ特集「初代編集委員へのインタビュー」では、来ぶらり創刊に至る経緯や当時の様子が掲載されています。

当時は
2色刷りでした

同じ1983年に誕生したもの

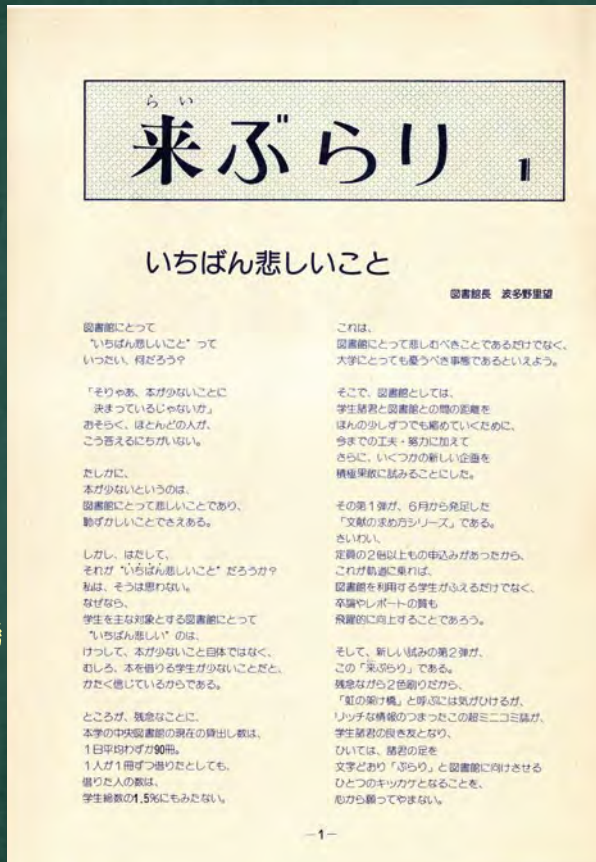
- 東京ディズニーランド ● 森永製菓「バックンチョコ」
- ファッション雑誌「ViVi」（講談社）、「LEE」（集英社）
- 任天堂「ファミリーコンピュータ（ファミコン）」
- テレビアニメ「キャプテン翼」放送開始
- 劇団四季のミュージカル「キャッツ」の公演開始

1983年の流行

- NHK朝のテレビ小説「おしん」放送開始、視聴率（関東地区）60%超え
- 映画「南極物語」が大ヒット
- 流行語として義理チョコがブーム
- 尾崎豊「15の夜」レコード発売

サイズは
1つ折りのB5サイズ

当時、ここまで工夫された
図書館広報誌は
珍しかった!?



来ぶらりの先輩「かるね」

来ぶらり創刊の前に、学習院大学図書館では「かるね」というミニ情報誌が発行されていました(1978年5月～1982年4月)。ワープロもまだ普及していない時代でしたので、担当者が原稿からイラストまですべて手書きで記述し、それを複写機で数十部作成した後、カウンターの片隅に置いていました。



『図書館年鑑1984』※にて以下のように紹介されました。

学習院大学では、新しく「来ぶらり」という館報が発行された。ネーミングもさることながら、字体、構成などオシャレな仕上がりとなっている。このように館報も各大学で工夫を加えて出されるように、単なるお知らせや推薦図書を先生に書いてもらうといったことだけでなく、レファレンスの事例や、文献解題、類縁機関の紹介など、少しでも利用者を読んでもらおうという意気込みを感じるものが多くなっている。

—p.133より一部抜粋

※日本図書館協会が発行する年鑑。1年分の図書館界の動向が図書館の館種にかかわらず記録・収録されている。
所蔵場所: 大学図・書庫 010.5/31//P

33年分のバックナンバーを振り返ってみました



本の名称、
知っていますか？

No. 2

1983年10月発行

創刊当初のイラストは、全て図書館員が描いていました。2号には、「本の名称」がイラスト付きで説明されています。みなさん、1冊の本に、こんなに名称があることを知っていましたか？



28年前の未来予想...
答え合わせをしてみよう！

No. 20

1988年1月発行

2008年-20年後の学習院図書館
コンピューター・ネットワーク、資料の電子化、オンライン目録...当時の図書館員が20年後(2008年)の未来をどう考えていたのか、気になる方は、読んでみてください。

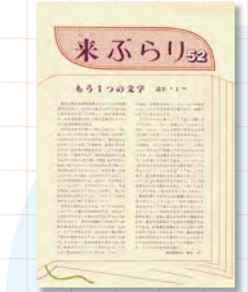
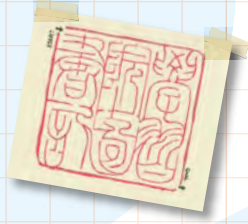


手作り・手作業の時代...
当時の図書館員の器用さ、
細かさに驚きます。

No. 47

1994年10月発行

としょかんやの職人たち
電算化される前に使われていた「ガリ版カード」。各自愛用の鉄筆でガリガリと転写して孔をあけ...他にも、蔵書印を押す際に必要な朱肉のケアはひまし油を用いて行っていたそうです。

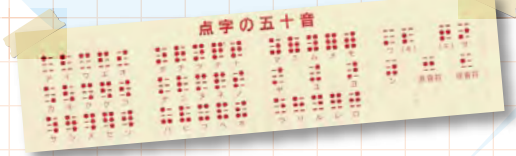


普段、何気なく目にする点字に
着目しています。

No. 52

1996年1月発行

もう一つの文字/点字の50音
点字は、全部で64文字。その限られた中で、50字の平仮名、26字のアルファベット、数字、記号...とさまざまな文字を表しているそう。点字の「・・・」は、「アイウ」とも「ABC」とも「123」と読めるそうです。



図書館に置く本をどのように
決めているのかがわかります。

No. 73

2004年4月発行

**本はどこからやってくるのか？
-選書の仕事Q&A-**

Q: 選書ってどんな仕事? →
A: 図書館に置く本を選定する仕事です。
Q: 誰が選書を行うの? →
A: 図書館員で構成された選書委員が行います。

など、本がどのように図書館にやってくるのか、みなさんの疑問にお応えしています。



誌面を増やして
特集しました。

No. 93

2013年12月発行

学部長のこと、教えてください!
当時の学部長にロングインタビューを行い、その内容を掲載した号です。あまりにも内容が濃く、スペースの都合で省くのはもったいないという編集委員の思いから、臨時に誌面を増やして発行しました。すてきな似顔絵が凝っています!

1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

- 1983 四大学図書館長懇談会 (第1回)開催
- 1984 大学図書館にフリップ導入 (目録カード作成のため)
- 1985 1億枚の売り上げ突破 (発売は82年12月)
- 1986 テレホンカード
- 1987 コンピュータ化への準備開始
- 1987 カナダと電話回線にて接続し洋書目録作成
- 1988 東京ドーム開場
- 1989 デジタルデータ化開始
- 1990 パブル崩壊
- 1990 雑誌データベースの館内OPAC提供開始
- 1991 東京都庁が新宿に移転
- 1992 デジタルデータ化開始
- 1992 毛利宇宙飛行士がスペースシャトルで宇宙へ (日本人初)
- 1992 洋書目録のデジタルデータ化開始
- 1993 法経図書センター開館(東2号館)
- 1994 大江健三郎ノーベル文学賞受賞
- 1995 インターネットによるOPAC運用開始
- 1996 大学図書館ホームページ稼働(1995年11月)
- 1996 WWWによる試験運用
- 1997 機械貸出開始
- 1997 自動貸出返却機設置
- 1998 長野冬季五輪
- 1999 大学開学50周年記念式典
- 2000 学内ネットワークによるCDROM検索システム運用開始
- 2000 山手線沿線私立立教大学図書館コンソーシアム協定締結
- 2001 ユニバーサルスタジオ・ジャパン開業
- 2002 日韓ワールドカップ開催
- 2002 学習院創立125周年記念式典
- 2002 電子図書館システム運用開始
- 2003 六本木ヒルズ開業
- 2004 愛知万博(愛・地球博)開催
- 2006 学習院図書館和漢図書目録デジタル化と公開
- 2007 試験期日曜開館スタート
- 2008 大学中央教室(カミミッド校舎)が解体される
- 2009 日本女子大学との利用協定締結
- 2009 豊島図書館ネットワーク協定締結
- 2011 東日本大震災
- 2011 四大学図書館懇談会に甲南大学が参加
- 2012 東京スカイツリー開業
- 2012 京都学習院旧蔵資料デジタル化と公開
- 2013 華族會館寄贈資料のデジタル化事業スタート
- 2014 学習院大学ディスカバーサービス運用開始
- 2015 学習院学術成果リポジトリ公開
- 2016 来ぶらり100号達成!!

※青文字は大学・図書館の出来事です。



いにぐっとくる
特集です。

No. 5

1984年4月発行

難民キャンプにも図書館が!!
明日の命も保障されていない難民キャンプで本に夢中になる子どもたち。現代の日本人が忘れていた、人としてあるべき姿に気付かされます。

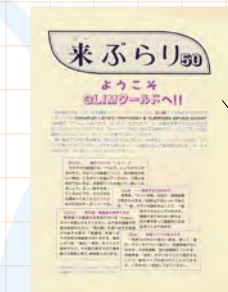


昔も今も、
私たちは見えないところで
奮闘している!

No. 35

1991年10月発行

**図書館の舞台裏からPart2
臨時増発・超特急**
“至急利用したいそうです。”スタッフ6人 超特急の整理作業を開始 ~ (中略) 自分の所での停車時間を少しでも短縮しようと全力を尽くす。“引き渡せませう”という電話の向こうに見えない利用者とのきずなを見る。整理係のささやかな喜びの一瞬だ。
超特急の電車になぞらえて本の整理業務を紹介した記事です。少しでも早くみなさんに本を届けるために、見えないところで多くの人の手がかかっているのは昔も今も同じようです。



GLIM/OPACのGLIMの
正式名は...?

No. 50

1995年7月発行

ようこそ、GLIMワールドへ!!
この年に新しくなった図書館コンピュータシステムは「GLIM」と名づけられました(今も「GLIM」/OPACという名称として使われています)。生まれたてほやほやの「GLIM」が、当時どのように学生に宣伝されていたのかが伺える記事です。



17年後に同じ特集を
組んでいます!

No. 60

1998年1月発行

“おもしろ事典(辞典)”
『ハープ大百科』や『昭和家庭史年表』、『世界文学にみる架空地名大事典』など、さまざまなおもしろ事典が紹介されています。また、なんと、17年後の98号でも同じ特集が組まれています。図書館には、みなさんに紹介したい隠れたおもしろ事典がたくさんそろっているのです。



どうして「来ぶらり」は
大学を飛び出しました!?

No. 88

2011年10月発行

**コラボ with 立教大学図書館
立教大学図書館へ行ってみる?**
他にもあまり類をみない、他大学図書館(立教大学)と一緒に作成・発行した号です。「来ぶらり」には学習院大学の学生が立教大学図書館を見学した様子が、立教大学図書館広報誌「Your Library No.16」には、立教大学の学生が学習院大学図書館を見学した様子がそれぞれ掲載されています。



国際化が進み、アジアに3校、中近東に1校、
欧米に各1校の地域校が設置されている
(by 図書館員)

学食がおいしくなる
(by 心理学科1年生)

ロボットが日常的に
人間と協働している社会
(by 図書館員)

ドラえもんみたいな
ロボットがいる
(by 数学科1年生)

30年後の
「学習院大学」

30年後の「世の中」

授業がネット配信形式となり、
有望な学生のみが教授の前にした
リアルな授業を受講できる
権利を与えられる
(by 図書館員)

全ての校舎が渡り廊下か
地下でつながり、
特に雨の日がはるかに快適になる
(by 日本語日本文学科4年生)

ガソリン車が消える
(by 心理学科1年生)

有名教授の授業動画を
他大学の学生が見て勉強するようになり、
スタジオ機能を持つ教室ばかりになる
(by 元図書館長 法学部平野浩教授)

来ぶらり 200号の未来予想

来ぶらり創刊(1983年)から100号(2016年)が発行されるまで、約30年。
この間に、世の中も、大学図書館も、来ぶらりの形態も様々に変わってきました。
では、「200号」が発行される約30年後はどのような未来が待っているのでしょうか。
30年後の未来を皆さんに予想してもらいました。

本の世界を体験できる
マシンが置かれている
(by 経済学科1年生)

多様な用途に対応する
アミューズメントパーク
のような施設に
(by 図書館員)

多額の寄付があり、
15階建てとなっている
(未来予想でなく願望)
(by 図書館員)

紙の本は並んでいるか?
並んでほしい。
いや、きっと並んでいる!
(by 元図書館長 理学部荒川一郎教授)

200号特集」を組んで学生に
「30年後の『来ぶらり』は?」と
アンケートを取っている
(by 政治学科4年生)

図書館建屋自体は存在なくなり、
壁新聞となって書庫の建物の壁に
毎日張り出される
(by 図書館員)

30年後の
「学習院大学図書館」

30年後の
「来ぶらり200号」

学生証を出さなくても、
ゲートをくぐるだけでOK
(by 心理学科1年生)

さらに蔵書が増えて
図書館アルバイトの仕事が
大変になる
(by 数学科1年生)

来ぶらりマスコットキャラクターが誕生し、
さくまサンをしのぐ大人気となっている
(by 図書館員)

紙の本が珍しくなって
図書館が博物館化している
(by 哲学科3年生)

専用のスマホアプリが
開発され誰がどこでも
自由にシェアできるSNSサイトへ
(by 心理学科2年生)

脳に直接ダウンロードされる
(by 図書館員)

現在の建物のまま築80年を迎え、
図書館は時間が止まった空間となり、
それはそれでよい味を醸し出す場所と
なっている
(by 図書館員)

レポートの参考資料を探しに行くと、
膨大な文献や動画のすべてが一瞬にして
携帯端末に表示され、図書館スタッフが
「見なくてよいもの」を教えてくれる
(by 元図書館長 法学部平野浩教授)

出版物の電子化の波に目もくれず、
ひたすら紙にこだわり、
同じ形態で発行されている
(by 図書館員)

初代編集委員へのインタビュー

来ぶらり創刊号を手がけた初代編集委員のお二人に、
現役編集委員が話を伺いました。

大学図書館次長 中村 丈夫
女子中・高等科図書館 花田 裕子
来ぶらり編集委員 内藤 沙織・正木 さと子



花田 司書



中村 司書

内藤：今日は「来ぶらり」創刊号の編集委員を務められたお二人に、
当時のお話を伺いたくお集まりいただきました。よろしくお願ひします。
さっそくですが、創刊号に編集委員の名前がありませんね。

中村：実は創刊号には編集委員の名前は出していないんです。名前
を出したのは2号からで。当時の館長の波多野里望先生が編集権と
いうのを強くおっしゃっていて、だからこそ責任の所在として編集委員
の名前をきちんと載せるべきだということで、2号から掲載するようにな
りました。

内藤：そのような経緯があったのですね。そもその話ですが、最初
に「かるね」という刊行物があって、その後に「来ぶらり」が発行され
たのですね。

中村：そうですね。「かるね」は
簡単に手書きで書いて何十部
かコピーしたものを館内に置い
ておくだけだったけれど、より学
生に対して広報をする必要があ
るとする波多野館長の提案を受
けて、「来ぶらり」が誕生するこ
とになりました。また、「来ぶらり」



当時の編集ノートと誌名募集の投票結果用紙

という名前は、図書館員全員から募集した案をいくつか絞り、最終
的には館長が自身の授業で学生に投票してもらい決まったものでした。
「ぶらり来る」と「library」とをかけていて、ぶらっと図書館に来ても
らいたいという思いが込められているんです。

「来ぶらり」の目指すところは、とにかく広報誌ということでした。当時、
多くの大学が出していたのは「図書館報」で、報告書のような固いも
のばかりでしたが、「来ぶらり」は、図書館のしくみやサービスを学生
にわかりやすく宣伝するという目的で作られたものです。学生にわか
りやすく、学生にとって一番利益になって、「図書館ってこういうこと
をしているんだ！行ってみよう！」と思ってもらえるような広報誌を目指
して作っていました。

正木：今と同じですね。当時は、どのような工程で作られていたん
ですか？

花田：紙面割りやイラストも全部自前で、私たち自身で行っていました。
また、文章の助詞など、細かいことにも気を遣っていました。

中村：とにかく読み手にとってわかりやすいように、専門用語は使わ
ずやさしい平易な言葉で書くように気をつけていました。語尾や送り
仮名を統一するために、『朝日新聞の用語の手引き』に基づいて
編集していましたよ。例えば、「コンピューター」は、「ター」と
伸ばすものと「タ」と伸ばさないものが混在していると良くない
から、表記を統一するための根拠としてこの手引きを使用してい
ました。



使用したフォントの羅列や色の詳細を番号記録していた
(同じフォントを後に使用する際にすばやく指定できるように)

花田：「その通りです」の「通り」を平仮名にしたり、「果たして」を
仮名表記にしたりですね。

中村：図書館から出すからには、表記はきちんとしたいという思いが
ありました。その分、原稿チェックに時間がかかりました。

花田：ええ、今と違って全部手書きだったので、いろいろと大変でした。

正木：1年に何回発行されていたのですか？

花田：4回です。大変だったけれど、みんな書くことが好きな人ば
かりだったので、喜んで書いていましたね。なかにはこだわりがあって、
依頼したテーマとは別のことを書いてきましたという人がいて困ったこ
ともありましたよ。

内藤：みなさん意気込みがすごいです。

中村：業者に出す際にも何から何まで指定するんです。文字の大きさは
もちろん、このページは原稿が何文字で、罫線をどこに引いて、どれ
位の大きさのイラストを入れたら
収まるか、などを常に考えなけ
ればいけませんでした。

花田：一度、指定を間違えて「来
ぶらり」のタイトル部分がベタ
塗りの変な色になってしまったこ
とがあります。これです、7号で
すね。



一番右が7号(他と比べるとタイトルの地がベタ塗りとな
っている)

内藤・正木：この色は間違いだっ
たんですか!?笑

花田：あと、三国志の「志」という漢字を間違えて、印刷後に全部
スタンプで直した時もありました。

正木：気が遠くなる作業ですね。

内藤：今も私たちの悩みの種ですが、学生
に広報誌の存在をアピールするために、当時
はどのような方法を取られていたんでしょうか。

中村：市販のラックに入れるのではなく、
館長の発案で半円の手作りの容器を作りま
した。立体的に置くことで、目立つようにな
ると。また、図書館以外の研究室や事務室
にも置くようにしていました。

花田：容器を全員総出で手作りしたことを今
もすぐ覚えてます。大変でした。



手作りの状差し

内藤：当時の波多野館長、編集委員、そして図書館員のみなさんは
たいへんな苦労や情熱をもって「来ぶらり」を作成・発行していたの
ですね。これも全て学生に図書館のことを知ってもらい、より身近に
感じてほしいから。そしてその思いは創刊号が発行された当時も
100号を迎えた現在も変わることなく、脈々と

引き継がれていますね。
これからも学習院大学図
書館の顔として、より内容
を充実させた「来ぶらり」
が200号、300号を迎えら
れることを願ひます。本日は、
貴重なお話をありがとうございました。



information①

来ぶらりバックナンバーは ここで見られます

来ぶらりと来ぶらりの前身「かねる」は創刊号から最新号まで全て
学習院大学図書館Webサイトにて公開されています。

ホーム> 大学図書館について> 図書館刊行物

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/glim/about/publication.html>



information②

来ぶらりバックナンバー 館内展示のお知らせ

来ぶらり100号発行を記念して、大学図書館1階の展示コーナー
にてバックナンバー等の展示を行います(5月予定)。是非ご覧ください。



館長からのメッセージ

“カフェで勉強するより図書館を利用する方がお得”

図書館長 遠藤久夫教授

スタバなどのカフェで熱心に勉強する学生さんをよく見かけます。「家ではだらけてしまい集中できないから」「一人で勉強をしていると寂しくなるから」「スマホでネットにアクセスするから資料がなくても問題ないから」といった理由からだそうです。それはわからないでもありませんが、もっと良い場所があります。それは図書館です。図書館は堅苦しそうで敷居が高く、あまり利用していない人も多いかもしれません。しかし、図書館の利用は、カフェでの勉強より絶対にお得です。第一に、適度に静かでありながら孤独ではない理想的な勉強環境が整っていますし、ゼミなどの共同研究にも利用できる場所も用意されているからです。第二には、いうまでもなく図書館は膨大な書籍や資料を備え、オンラインデータベースを整備した「知の宝庫」だからです。今は、ネットで情報にアクセスする人も少なくありません。しかし、そのような情報は表面的で、場合によっては間違っているケースもあります。本気で調べる、勉強する上で、図書館の情報資源は非常に役立ちます。図書館にはこのような魅力がありますが、使い方がよくわからないという人も多いことでしょう。そのため各種のガイダンスやセミナーを実施しています。ぜひこれを活用してください。

この「来ぶらり」は今回がNo.100です。約30年前に創刊されたNo.1のコラムは「いちばん悲しいこと」というタイトルで、図書館利用の少なさを嘆き、利用者の増加を訴えたものでした。この30年間でネット環境は激変しましたが、図書館のもつ「場所」と「情報」の魅力はさらに増したといえるでしょう。より多くの方が図書館利用の常連さんになってほしいと願います。それこそが図書館にとって「いちばん嬉しいこと」だからです。

来ぶらり No.100 2016年5月2日

学習院大学図書館 〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

発行責任者：遠藤久夫教授 編集委員：内藤沙織・正木さと子

1階貸出・返却カウンター（内線2397）：☎03-5992-1009（直通） 2階レファレンスカウンター（内線2395・2396）：☎03-5992-9249（直通）

「来ぶらり」のバックナンバーは（<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/glim/about/publication.html>）で公開しています。